

この町に手紙は来ない

脚本…須貝 英

○登場人物 (M 男性 / F 女性)

M 1
M 2
M 3
F 1
F 2

※この戯曲において、誰がどの役をやるかはとても重要な問題である。指
定すると演出の幅が狭まるかもしれないが、できれば守ってほしい。
※同じ人物が違う役を演ずることも同様に意味があるため、五人での上
演、男女比もこのままであることが望ましい。
※最後の二編の「彼女」のみが全編を通して唯一の同一人物である。

『凶報の使者』

弟 M 1
使者 M 2
妹 F 1

『不機嫌な兄弟』

男 M 3
妻 F 2
兄 M 1
若い女 F 1

『薄墨の花の咲くを待つ』

女 F 1
回収係 M 2

『銃前会議』

大佐 M 2
巡査 M 3
配達人 M 1
息子 F 2
娘 F 1

『顔のないロケットサマー』

彼女 F 2
教授 M 1
夫 M 3

『この町に手紙は来ない』

彼 M 1
少女 F 1
先生 M 2
彼女 F 2
友人 M 3

○舞台装置

大きなテーブルが舞台中央を占める。

椅子が必要に応じていくつか。

古びたチェストが一つ。

家具は木製であることが望ましい。

木製のドアがある。これは住居部分の出入り口である。

窓が一つ。

出入り口は二つ以上。

舞台上のどこかに、ト書きで指定のある数字を掲示しておく工夫が必要である。

この数字は場面が転換することに俳優によって変更されていく。

全体に白っぽい色合いの空間であることが望ましい。

が、絶対ではない。

ある孤独を感じる舞台であればよい。

○舞台設定

ある惑星のある国。

小さな国のようなのだが、大きな戦争に勝つたらしいことが分かる。

その国のある町の、ただ一つの郵便局が舞台となる。

郵便局の建物は局員の住居も兼ねており、実際に物語が展開される空間は郵便局の裏側にある応接間兼食堂のような場所である。

家族が過ごす場所だが、郵便局の関係者や用のある者が出入りできる公の場でもある。

季節は何度も巡るが、次第に境目がなくなっていく。

※この版では特別に、戯曲を補完する形で書かれた小説も併記する。

ノックノックノック。
静かに。

ノックノックノック。
声を潜めて。

ノックノックノック。
彼がやって来た。

この町の興り

この町には何もなかった。

町ですらなく、少しばかりの拓けた土地と、廢墟手前の家々と、建材に使えそうな木々の生えた林と、以前この土地を打ち捨てた居住者が土中に放置した種芋があるばかりだった。

それでも二人はこの町に居を構えることにした。逃げ出した二人には他に選択の余地がなかったし、二人でいられさえすればどこでもいいと本気で思っていた。心から、そう思っていた。

最初の年は建物の修理に費やされた。前の居住者が残していった家屋のうち、最も原形を留めているものを選んで住んだ。一緒にこの町に入居して来た家族と協力し、一ヶ月ほどで雨露をしのげる程度にはできたものの、その後も内装や外装の細々とした修繕が必要で、なんとか住めるようになるまでさらに五ヶ月程を要した。最初この町を訪れたのは全部で四世帯、細かな時期の違いはあれ、ほとんど同時にやって来た。徴兵から逃れて来た者や疎開して来た者など理由は様々であったが、誰もお互いにその理由を探り合おうとはしなかった。なぜなら、誰もが本当はこんな所に住みたくないと思っており、確認するまでもなく、こんな所に来なければならなかった理由など話したいはずもないと分かっていたからだった。それでも彼らはこの入植に希望を込め、未来を託すしかなかった。

同じ境遇に置かれた彼らの結束は強かった。二つの家族が建物を修繕し、二つの家族が作物を収穫した。必要最低限の仕事を分担し始め、社会が生まれ、余裕が生まれる頃には文化を取り戻し、ちょうど戦争が終わって、この

四世帯が町にやって来てから初めて大きく息をつくことができた。入植から三年の月日が経とうとしていた。

次に何をすべきか、町の人々は寄り集まって考えた。必要な物がある。昔ながらの物々交換で得られるものもあれば、貨幣制度に準じなければ手に入りそうにないものもあった。四世帯の男たちは代わる代わる、近くの都市へ出稼ぎに出ることにした。戦争に勝ったとは言えこの国はまだ疲弊しており、都市はたくさんの人足が必要としていた。建設ラッシュが始まるだろうとの予測が新聞の情報からも得られた。一世帯の男が残り、残りの三世帯の男たちが出稼ぎに出る。一ヶ月周期で交替し、純収入は四世帯で共有の銀行口座に貯蓄することにした。このシステムを導入してから一年程が経つと、口座にはかなりの貯金ができた。そして副産物として、出稼ぎ先で男たちが出会った人々がこの町に移住してくるようになった。人が増えれば弊害もあるが、生まれたばかりのこの町にはどちらかといえば利点の方が多かった。

一度誰かが、この町を捨てた人々がいつか戻って来るのではないかという当然の疑問を呈した。皆しばらくはその覚悟を決めて以前の居住者を待ち受けていたが、戦争が終わってしばらく経っても、彼らは誰一人として戻っては来なかった。ある者は彼らの存在を忘れ、ある者は自分たちの所有権が確立されたと安堵し、ある者はそれでも以前の居住者に敬意を払うことを忘れてはならないと主張し、ある者はいつか彼らも戻って来る、その時は共に暮らしていけるはずだと樂觀し、ある者はいつか彼らも戻って来る、その時私たちはこの町を出て行かねばならないと悲観した。様々な思惑が飛び交う中でしかし、彼らの誰もが一つの不安を感じていた。なぜ彼らは誰一人として戻って来ないのだろう。その疑問が大きな影をこの町に落とし続けた。

凶報の使者

284から279へ。

暗闇の中にノックの音が響いている。

暗がりにも光が灯り、ゆっくりと二人の姿がさらけ出される。

妹は何かを見限るように歩み去った。残り香が暗闇に溶ける。

弟はそれを目で追った。追いかけることはしなかった。

ノックするのは凶報の使者。

寂れた室内で弟は息を殺してそれを聞いている。

自分がやがて諦めて、ドアを開けることが分かっている。

ドアを開けると、冷たい外気と一緒に使者の気配が忍び込む。

台所では妹が、息を殺してその様子に耳を傾けているに違いない。

使者 いるじゃないか。

弟 聞こえなかったんだ。

使者 (疑わしげに室内を見回す)

弟 奥にいた。

使者 奥があるのか？

弟 あるんだよ。納屋に繋がってる。

使者 ああ、(外から見えた) あれは納屋か。

弟 多分、空襲でやられたんだ。

使者 納屋というより廃墟だな。

弟 直すよ。

使者 どうして燃やしたんだろう。

弟 何しに来たか分かってる。

使者 ……。

弟 あんたが何をしに来たか分かってる。

使者 じゃあ話が早い。

弟 帰ってくれ。お願いだから。帰ってくれ。

使者 喉が、渴いたよ。

弟 帰ってくれ。

使者 お茶を飲んだら帰る。用意してるんだろ？ 今。

弟 帰ってくれ。

使者 お茶を飲んだら帰る。

妹がお茶を二つ持って入って来る。

妹 久しぶり。

使者 久しぶり。元気そうだ。

妹 兄さんも。少し痩せた？

使者 そう見えるだけだ。変わってないよ。

妹 ならいいの。

妹、二人にお茶を出す。台所に戻ろうとするが、

使者 連れ戻しに来たと思ってるんだろ。

弟 それ以外の理由がない。

使者 違うよ。

弟 あんたが許せるはずがない。

使者 何を？

弟 自分の考えに沿わないことを。

使者 あの家の中ではな。

弟 どこにいたってそうだろ。

使者 だからこんな所まで逃げて来たのか？　ここなら俺の目が届かないと？

弟 あんたのそういう所が嫌いなんだ。

使者 そういう所？

弟 見透かしたように話すな。

使者 今更お前たちを管理するつもりはない。二人で好きに暮らせ。

弟 じゃあ何しに来たんだ？

使者 祝いに。

弟 嘘をつくな！

使者、封筒を取り出してテーブルの上に。

使者 五年間お前たちを探した。五年も誰かを恨み続けることはできないよ。

弟 人による。

使者 人は変わる。

弟 あんたが？

使者 俺が何も学ばなかったと思ってるのか？　お前たちがいなくなつて。

妹 (テーブルの上の封筒を見ている)

使者 (妹に) 開けてごらん。

妹 (開けようとする)

弟 やめろ。

妹 (やめる)

使者 開けてごらん。

妹 (封筒を開け、中の書類に目を通す) 郵便局……？

使者 通信院(ていしんいん)に帝大の同期がいてな。話をつけてきた。

弟 (書類を見て) なんだこれは。

使者 親父が村の郵便局の局長を兼任してるの、知ってたか？

弟 何の話だ？

使者 あの土地は親父が国に無償で提供してるからなんだよ。それと同じだ。この家を局舎として無償提供するんだ。

弟 この家を郵便局にしろってことか？

使者 この町にはまだないだろ。立地もいい。

弟 ……。

使者 今後我が国は同盟国の郵便制度を段階的に取り入れていくらしい。

あと二年ほどでまた制度が変わるそうだから、今が始め時だ。お前たちの子供や孫の代には、きっとここがこの町を中心になる。

弟 ……。

使者 なんだその顔は。せっかく戦争に勝ったんだ。少しくらい浮かれろ。

弟 郵便局なんて、どう始めていいか分からない。

使者 学べよ、必死に。どうせ踏み出した一歩だ。二歩目を踏み出さないと、転ぶぞ。

弟 ……。

妹 泊まって行くでしょ？　狭いけど、ベッドの用意をするわね。

妹、去って行く。

使者 町という単位が消滅する時、最後の砦になるのはなんだと思う？

弟 なんだって？

使者 何がなくなれば町は終わりかという話だ。交番？　違う。学校？　違う。病院？　違う。郵便局なんだそうだ。意外だろ？

弟 一体どこで聞いて来たんだよ。

使者 都市工学をやってる友達の受け売りだよ。ある温泉街がダムの底に沈んだ時、一番最後まで運営されていた公共機関が郵便局だったそうさ。

弟 なるほど。

使者 この町で何があっても、お前たちが踏み止まるんだ。最後まで。

弟 やってみるよ。

使者 お前は俺と違って母さんに似たから、始めれば飲み込みは早いだろう。(妹が去った方を見やって) あいつは俺と同じで父さん似だ。困った時に咄嗟の判断を下せない。

弟 分かってる。

使者 子供は？

弟 ……。

使者 ……もういるのか。見た目にはまだ分からないな。

弟 無事に産まれるといいけど。

使者 普通の子供が産まれればいいな。

沈黙。

弟 部屋を増やすんだ。あの納屋を直す。

使者 どうしてここの住人は納屋を燃やしたんだろうな。

弟 空襲で燃えたんだろ。

使者 空襲ならもっと大規模に燃えたはずだ。昔の住人が燃やしたんだよ。火種はいつも内側にある。外に敵を作るのはそれを隠すためだ。今回の戦争だってそうやって始まったはずなのに、今では誰もが忘れて、熱狂的に支持したはずの独裁者を悪者にしてる。気を付ける

んだ。

弟 何に？

使者 問題を解決する順番に。まずは自分たちの問題。次に他の誰かの問題。

弟 もし間違ったら？

使者 悪いことが起こるよ。俺たちが死んだ後のずっと先の未来で。その時にはもう回避することも謝することも出来ない。

弟 ……また来てくれるか？

使者 いや、もう来ない。もうここには来ないよ。

弟 そうか。

使者 その代り手紙を出そう。この郵便局にあてて。

弟 仕分ける必要がないな。

使者 楽でいいだろ？

弟 (笑う)

使者 (笑う)

弟 ……ありがとう。

使者 いや、いいんだ。

ゆっくりと暗闇が訪れる。

瞼を閉じるように。

この町の葬儀

桜が満開に咲く頃だった。この町で最初の喜びが、この町で最初の悲しみに変わった。

二人とも、産まれた赤ん坊の姿を見せてはもらえなかった。隣の村から呼び寄せた産婆が手早く白い布でその赤ん坊を包み、彼が頼んでも彼女が頼んでも、頑としてその包みを開こうとはしなかった。彼女は泣き声がいつまで経っても聞こえなかった時に赤ん坊の死を悟り、彼は産後の室内の張り詰めた空気を感じた時に赤ん坊の死を悟った。白い布にうつすら血が滲んでいた。それは彼女の血だったが、二人には赤ん坊の血に思えてならなかった。

「目ん玉が、一個ぎりしがねがった」

産後、二人の隣に住む住人に産婆がぼそりと漏らした。

「はえどご埋めでやんねっぎゃ、あんまりにももごせべした」

訛りの強い産婆の言葉を、この地方出身の者が他の住人のために訳した。

「かわいいそうだから早く埋めてやれ、ということですよ」

この町ではまだ、一人の死者も出てはいなかった。皆、何をどうすればいいのかわからなかった。隣の村から僧侶を呼ぶにも来るのに三日ほどかかるということだった。棺の作り方など誰も知らなかった。墓所にすべき場所すら決まっていなかった。結局産婆とこの町の一番の年長者が主導して、簡易的に葬儀を執り行うことになった。

亡骸は桜の木の根元に埋めることにした。それは二人の住む家のすぐ隣に立っている、樹齢をかなり重ねた桜だった。牛乳瓶を入れる木箱に亡骸を納

め、蓋の代わりに手の平ほどの幅の木の板を適度な長さに切り揃え、一枚ずつ打ち付けていった。この仕事には、大工仕事で町で一番得意な彼が当たった。息子が娘かも分からない自分の子を閉じ込めていく金槌の音を聞きながら彼は、まだ泣くこともできない、と他人のことにように思った。

翌日、彼らの子供の葬儀が行われた。参列者は自分たちの持つ一番上等な服に身を包んで参列した。この町の全ての住人がこの葬儀に参列した。ただ一人、彼女だけは床に就いたまま葬列を遠くから眺めていた。彼らの家の大きな窓から、彼女は葬列を成す住人たちの上半身だけを眺めていた。真っ白なペンキで塗られた小さな箱を肩に背負う夫を遠くから眺めた。その箱が桜の木の根元に埋められる所は、彼女の寝ている場所からは見ることが出来なかった。しかし、その光景を見ていようが見ていまいが、誰にもそれを現実として捉えることが出来なかった。この出来事にどう対処していいかわからなかった。

「元々死んでいたんだろうか。それとも産まれて間もなく死んだんだろうか」

誰かが言った。

「それが一体どうしたっていうんだ」

「どちらにせよ、なんらかの救いになると思ったんだ」

葬儀が終わると銘々帰路に就いた。彼と産婆は彼女の枕元へ報告へ上がった。産婆が彼らに、

「女の子だったよ」

と告げた。彼らは泣いた。二人で身を寄せ合って、明け方まで泣いた。

不機嫌な兄弟

279から230へ。

男が帰って来る。配達の帰りらしい。
ドアを開け、椅子に座り、一息吐く。
男の妻、登場してきて彼を見ている。
暫くして、声をかける。

妻 おかえり。

男 (驚く) ああ、ただい……、

妻 もう食べちゃう？

男 うえ、へ？

妻 お昼、食べちゃう？

男 ああ、うん、そうだね。

妻 分かった。お水？

男 え？

妻 お水、飲む？

男 ああ、うん、ありがとう。

妻、去ろうとする。男、それを追うが、

妻 座ってて。持って来るから。

男 ああ、うん。

妻、水を取りに去って行く。

男、仕方なく待っている。
しばらくして、妻が水の入ったコップを持って戻って来る。

男 ありがとう(コップを取ろうとする)。

妻 (コップを渡さない)

男 なに？

妻 今日言うの？

男 え？

妻 今日話すの？ いつ言うの？

男 えーと、何を……？

妻 ……。

男 ……あー、兄貴のこと？

妻 (コップを渡す)

男 (受け取って水を飲む) 今日はちょっとタイミングが悪いから、明日話すよ。

妻 日話すよ。

男 変わり映えしない毎日の繰り返しの中で、一体どのタイミングを計

妻 るっていうの？

男 そういう流れを作るから。

妻 今日言うって。お願いだからこれ以上引き延ばさないで。

男 分かった、今日言うよ……(ごによごによ)。

妻 ねえ、今日言うって。

男 分かったって、言ってるだろ？ 今日言うよ。

妻 もう限界なの。

男 分かるけど、兄貴は元々ああいう感じだし……、

妻 違う違う、それもあるけど、お金が。

男 ああ。

妻 冬、越せないよこれじゃ。貯金ないよ。

男 郵便局なのにな。

妻 え？

男 金はあるのにな。使えないのな（笑う）。

妻 ……。

男 ……いや、うん。今日言うよ。

妻 うん、そうして。

男 ……兄責は？

妻 ランニング行ってる。若奥様と一緒に。

男 若奥様？

妻 一緒に連れて来た女。

そこへ、兄が帰って来る。

兄 ふー。

男 おかえり。

兄 おう。お前も？

男 うん、今休憩。

兄 そうか。ああ、僕にも水をもらえますか？

妻、無言で去って行く。

男 あの人は？

兄 ああ、途中まで一緒だったんだけど、さすがに俺についてくるのは無理だろ。置いて来ちゃったよ。

男 へえ。毎日毎日よくそんなに走れるね。

兄 当たり前だろ。体を鍛えるのも義務だからな。二年間の兵役が終わったらはいそれでお疲れさんとはいかないんだよ。二年間の予備兵

役、八年間の市町村警備、その間も定期的に召集を受けて陸軍訓練

学校の営庭に赴く。実弾射撃訓練、組み手による格闘訓練、最新の

兵器や世界情勢についての座学。我々軍人は日々神国を外敵より守

護するために弛まぬ努力を続けている。分かるな？

男 うん。置いて来ちゃって大丈夫なの？

兄 何が？

男 あの。迷わない？

兄 大丈夫だろ、子供じゃあるまいし。

妻、水を持って戻って来ていた。テーブルに水を置く。

兄 ああ、ありがとうございます（コップを受け取って）。昼飯は出来て

妻 いますか？

妻 はい、向こうに……、

兄、妻に構わず奥の方へ去って行く。

妻 ……またあれ、言ってたね。

男 え？

妻 二年間の兵役が終わったらはいそれでお疲れさんとはいかないんだよ。二年間の予備兵役、八年間の市町村警備、その間も定期的に召集を受けて陸軍訓練学校の営庭に赴く。実弾射撃訓練、組み手による格闘訓練、最新の兵器や世界情勢についての座学。我々軍人は日々神国を外敵より守護するために弛まぬ努力を続けている。分かるな？

男 おー（拍手）。

妻 覚えちゃったわよ。軍人でもなくせに偉そうに。

男 おい、
妻 海軍への志願入隊拒否されまくって、結局陸軍に強制徴兵されただけ
のくせに。
男 やめろって。
妻 強制徴兵なんて誰でも行けるもんこなしてきたからって、何が偉い
っていうの。
男 誰でも、じゃない。
妻 ああ、ごめん。
男 うん。
妻 ……。
男 ……。
妻 あの人は？
男 置いて来ちゃったって。
妻 え？ どこに？
男 知らない。
妻 帰って来れるの？
男 さあ。
妻 無理でしょあの子じゃ。迷うでしょ。
男 大丈夫じゃない？
妻 おつかい頼んだってまともにこなせないんだよ？
男 そうなの？
妻 じゃがいも買って来いって頼んだのに、ピザ買ってくるような子だ
よ？
男 えーそれは…、え、なんでピザ？
妻 このクソ忙しいのに、探しに行くなんてごめんですからね。
男 大丈夫だよ、いざとなったら俺が探しに行くから。
妻 あんたにだって仕事があるでしょ。

男 配達のついでに探してくるよ。
妻 ……もう話した？
男 いや、まだ。
妻 ……。
妻 そこへ、若い女が帰って来る。
若い女 戻りました。超疲れた。
妻 おかえりなさい。
若い女 置いてっちゃうんだもん。無理だよ追いかけるの無理だよ。
妻 そうよね、鍛えてるんですけどね。
若い女 軍人さんだからしょうがないですよ。なんかすごい森みたいな、
ジュース飲んでいいです？
妻 いいですよ。台所にお昼、あるからね。
若い女 えー今はまだ無理今は無理。吐きそう。お昼吐いちゃう。お昼、
リバース。リバース…：リバース！
若い女、奥へ去って行く。
妻 この国は終わりかもしれないね。
男 なんだよさつきから。
妻 なによ。
男 何が不満なんだよ。
妻 私が、一体、何に不満を感じているかも分からないのかい、あんた
は。
男 もちろん、分かっているけど。
妻 追い出しておくれよ、あの連中を。頼むよ旦那様。

男 ……。

兄、戻って来る。着替えている。

兄 さすが田舎、水と卵がうまい。この数日それしか食べてないけどな

かなかどうして、飽きない。でもどうだい、ねえ。今日あたり肉でもどうです肉でも。たんばく質を取らないとほら、筋肉がほら、あんまりにもかわいそうだから。

妻 卵にも。

兄 ー？

入ってますよ。たんばく質。

兄 ー卵。なるほど。

妻 あのさあ。兄貴さあ。

兄 ん？ なに？

ちよつと、言いたいことがあるんだけど。

兄 ああ、うん。

妻 ……。

男 あのさあ、あのさあ、言いたいことがさ、あるんだ。

兄 ああ、だから、うん。

男 あのさあ、ちよつとさあ、なんなの、あの人？

妻 え？

兄 あの人？

男 うちだつてさあ、そんなに広くないわけじゃん？ 寝てる部屋だつ

て隣同士だし、壁だつて薄いし。なのにさあ。

兄 なんなんだよだから。

男 声がさあ、大きいんだよ！

妻・兄 は？

男 毎晩毎晩飽きもせずさあ、声が大きいんだよ！ 毎晩毎晩！

兄 ああ……。

男 俺たちだつてさあ、眠れないしさあ、ムラムラしちゃうだろう？

妻 え……。

男 なあ？

妻 いや？

男 あれー？ そう？ 俺だけ？

妻 うん。

兄 仕方ないだろ、愛し合ってたんだから。二年間俺の帰りを待ってくれた女だぞ？ 毎日大事にしたいだろうが。

男 それをさあ、それはさあ、他でやってくれよ。

兄 ……。

妻 ……。

兄 ……つまりそれは、俺に、出て行けつてことになるな。

男 ……さういう、言い方も、出来るかもしれない。

若い女、やって来る。

若い女 すみませーん、マヨネーズどこです？

男 戸棚の上！

若い女 あ、はい。

妻 違う、冷蔵庫の上の段。

男 あ、

若い女 マヨバラ。

若い女、去って行く。

兄 男 兄
どこに行ってもそうだよ。
え？

兄 男 兄
どこに行っても俺たちを厄介者扱いしやがる。命を懸けて国を守ったっていうのに。俺たちがお前らに何をしてやったか、ぬるま湯に浸かったお前らには分かっていない。

妻 兄 妻
頼んでません。

兄 妻 兄
は？

妻 兄 妻
守ってくださいなんて、頼んでません。

兄 妻 兄
それはお前らが、守ってもらわなければならないほど弱いことを、一切、全く、分かってないからだよ！ お前らが弱くて恵まれてるから、誰かに守ってもらっていることを忘れてるからだよ！

妻 兄 妻
うん、その上で、重々承知の上で、頼んでません。

兄 妻 兄
誰かが攻めてきたらどうする！ 銃口の前に立ち、銃弾の盾となるのは俺たちだ。どうだ！？ お前たちの盾になるんだ！俺たちが！

男 兄 男
やめてくれよ。

兄 男 兄
は？

男 兄 男
そんなことしないでいいよ。死ななくてくれよ。

兄 男 兄
話にならない。

男 兄 男
すぐにとは言わない。でも頼むから、仕事を見つけて、準備が出来たら、

妻 兄 妻
今すぐ出てってよ。

兄 妻 兄
この女にそのかさされたんだな？ そうだろ？
人も殺したことないくせに。

妻 兄 妻
殺し方は知ってるぞ、今すぐ見せてやろうか？

兄 妻 兄
やめてくれよう！

妻 兄 妻
訓練しかしてないくせに。実戦経験なんかなくくせに。

兄 妻 兄
訓練しなきゃ戦えない。映画じゃないんだ、素人がさっさと銃を扱えてたまるか。

妻 兄 妻
私たちがあなたに出て行ってほしいのは別に、あなたが何をしてきたかとか徴兵されていたからとか、そういう外側のことじゃないです。

兄 妻 兄
じゃあなんだ？

妻 兄 妻
あなた自身です。あなた自身に出て行ってほしいんです。

兄 妻 兄
……。

兄、ドアから外に出て行く。

妻 兄 妻
この郵便局を守って来たのはあなたじゃない。おじいさんの代からのことを、受け継いだのはあなたじゃない。あなただっただって胸を張って生きていいのに、どうしてあの人に対して卑屈にならなきゃいけないの？ お兄さんだから？

男 兄 男
卑屈になんてなっていないよ。

妻 兄 妻
もしかして、あなたが徴兵を免除されたから？

兄 妻 兄
違う。

妻 兄 妻
じゃあなに。

男 兄 男
……でも、やっぱり俺は、兄貴に、出て行ってくれなんてほんとは言いたくないんだよ。

妻 兄 妻
どうして？

兄 妻 兄
うちの親父は、歳を取って段々、目が見えなくなって、荒れて、だから、

妻 兄 妻
お父さんはもういないでしょ。

男 兄 男
俺たちもあなるんじゃないかって、俺も兄貴も今でも、怖い。ビビってる。

男 妻

あなたとお父さんは違う。

この先どうなるかなんて保証できないよ。俺もいつかお前に暴力を振るうかもしれない。兄貴だって、元々ああいう感じだけど、元からああだったわけじゃない。こんな風になるなんて予測してなかったはずなんだ。

お父さんはもういないでしょ。

血の中に親父が流れてる！……俺たち、怖いんだ。自分たちがこれからどうなっていくのか分からな過ぎて、恐ろしいんだ。

それは誰でもそうだよ。私だってそう。

どうしてこんなに怖いんだろう。

生きてるからだよ。

……。

……来るといいね。

え？

明日が。

来るだろ明日は。毎日毎日。

私は今、時間の話をしてないよ。

じゃあなに？

あんたの話をしてるんだ。あんたの明日がさ。来るといいね。

俺の明日？

うん。来るといいね。

ああ、そうだな。

一緒に祈って生きていこうね。

……うん。

男 妻

ゆっくりと暗闇が訪れる。

瞼を閉じるように。

この町の養子

彼には、なぜ自分が「もらわれっ子」と呼ばれるのか、よく分かっていた。

この町の歴史などたかだか六十年か七十年、辿ろうと思えば全ての事柄の起源を審らかにすることができた。せいぜい祈るとするならば、自分が何か良くない事柄の初めてにならないことだけ。そうなってしまうのは最後、新しいこの町の新しい歴史のページに拭えぬ汚点を刻み付けることになる。でももし、その生まれ自体が汚点だとしたら？ その時は呪うしかない。何を？ 自分をその境遇に陥れた誰かを。それは誰か？ 間違はなくそれは、父親だろうと彼は思った。本物の父親の方の話だ。彼はこの町で一番最初のもらわれっ子だった。

養父母はともよくしてくれる。甘やかされていると言ってもいい。彼は養父母との記憶しかない。だから、彼の両親は彼らである。それでも彼は町の子供たちにもらわれっ子と呼ばれる日々を過ごしていた。成長するにつれ彼は、心ない言葉の起源が子供たちにはないことを知る。口さがない両親が食卓でそれらを吐き散らすのだ。子供らは意味も分からず、ただそれに倣っているだけなのだ。吐き気がした。絶対の悪だと思った。養父母以外の大人を信じることはすまいと心に誓った。彼はいつも一人で闘っていた。

家の側に建っている納屋の天井から収納式の階段を麻ひもで引っ張り降ろすと、かび臭い屋根裏部屋に続く。屋根裏部屋にはいくつかの木箱、それには秘密が収まって、日の目を見るのを待っている。

この屋根裏の存在は前から知っていたが、階段を上るのが危ないからという理由で麻ひもはかなり高い所に垂れていた。成長した彼には木製の脚立をその下を持って来るくらいのことならできる。屋根裏に忍び込み、釘でふた

をされた木箱をポケットに突っ込んだ小さなボールで次々と開けた。ほとんどが賞状や何かの記録や書類、何冊かのアルバムで、書類の方はよく分からなかったのが最初から目を通さなかった。古ぼけたアルバムを開いて写真を眺めていく。養父と養母の写真、たまに養父母の両親や彼は会ったことのない親戚と写ったらしい写真も出て来る。三つ目の木箱を開けた時、アルバムに収められていない写真が一枚、書類と書類の間から見つかった。

どうしようもなさがぼやけた色彩の隙間から漏れ出て来るような写真だった。男の方は年の頃三十から三十五、かなり筋肉質で、トウモロコシのひげのような髪の毛を長く伸ばして後ろで束ねていた。軍にいたらしく、腕には陸軍の階級章と所属部隊のナンバーが入れ墨されていて、自慢気に生やした口ひげが言いようのない怒りを駆り立てる。隣の女はまだ少年の彼にすら娼婦と分かる、薄汚い女だった。何がプリントされているかも判別できないよれたTシャツを着ている。下着は着けていない。これが自分の本当の両親だと、彼は直感的に信じた。写真を細かく徹底的に破り捨てると、そのまま屋根裏を後にした。自分の人生に楔が一つ、打ち込まれたように感じた。

数か月ほどして郵便局で養父を手伝っている時、写真の男が不意に窓口を訪れた。おい、坊主、と彼を呼び、親父を呼んで来いと酒臭い息で命令した。彼は突っ立ったままだった。男は、その首から下げているものはなんだ？ と彼に聞いた。彼は小さな袋を首からひもで下げていて、その中にはひとかけら残らず丁寧に拾われた、屋根裏に破り捨てたあの写真が入っている。あなたとのくそつたれの思い出だよ、と口の先まで出かかったが、なんとか思いどまり、養父を呼びに行った。養父と男は何かを話しながら郵便局の奥へ去って行った。おそらく二人は兄弟なのだろう。彼の腹の中で、何か黒いものがうごめいた。彼はいつも一人で闘っていた。そして、必ずそれに勝とうと決意している。

薄墨の花の咲くを待つ

230から180へ。

回収係の男が一人、室内で待っている。

かなり暑い様子で、しきりに汗を拭き、手で扇いでいる。

女、布の包みを持って戻って来る。

女 お待たせしました。

回収係 ああ、これはどうも、お手数おかけして。

女 いえいえ。それはこちらこそ、ですよ。

回収係 僕としても抜け出す口実になってますから、ありがたいんです。

女 前の方も同じようなこと仰ってました。

回収係 どれだけ退屈か分かるってもんでしょ。

女 工場ではどういったお仕事を？

回収係 主に商品の管理ですね。量ですとか質ですとか、時々従業員の健康

ですとか。大体全体的に管理してます。

女 それは機械がやるものなんじゃありませんか？

回収係 主にドロイドがやりますけど、やっぱり最後は人間ですね。ざっ

くりとドロイドが数を弾き出す、それを僕らが精査する。そんな順

番です。

女 なるほど。でも工場のおかげでこの町の経済もかなり上向きました

から、工場様々です。

回収係 それこそ、こちらこそ、ですよ。もうこの国じゃ、サトウキビが育

つのはこの辺だけですから。

女 そうなんですか。

回収係 ああもちろん、最北端にも工場はありますけどね。でも収穫はこ

女 かな所製糖工場が出来ると、最初は全然ピンと来なかった

回収係 母が言っていました。

女 親の世代は、砂糖なんて、ほとんど輸入してましたからねえ、僕

回収係 変わっていくんですね、時代って。

女 お、大きい話になりましたね。

回収係 すみません、ここにいるとあまり人と話さないから、話し過ぎちゃ

女 う。

回収係 いや、いいですよ、どんどん話してください。正直、工場に戻る

女 ああ……今日は特に暑いですねえ。……あれ？

回収係 え？ ああいや、実は、間違って洗濯物全部水洗いしちゃって。サ

女 ーモが全部いかれちゃったんですよ。

女 え、じゃあ、今、温度調節は……？

回収係 おじさん。全く効いてません。汗だっただく。ハハハ。

女 ごめんなさい！ 全然気が付かなくて！ 今冷たいもの持ってきて

回収係 ますね。

回収係 あ、いや、お構いなく！ なんだか催促したみたいで、あの……。

女 などと言っている頃にはもう、女は奥に去っている。

回収係、布の包みから手紙を取り出す。懐から端末を取り出す。

一つずつ端末で読み取り、何かを入力している。

女、レモネードを持って戻って来る。

回収係 ああこりゃ、どうも。

女 どうぞ。

回収係 すみません、早速仕事させてもらってます。

女 どうぞどうぞ。

回収係、暫く仕事をしている。

女 ありがとうございます。

回収係 え？

女 こんなに通信設備の整った現代で、まだ手紙なんて出してくれる人がいるなんて、ちょっと感動。

回収係 意外とね、いるんですよ。懐古趣味といえますか。形が残るものに人は惹かれるんでしょうね、最終的には。ああそうだ、せっかくだからいただきます。

女 どうぞどうぞ。

回収係 (レモネードを飲む) おやおや、これは……。

女 あー、

回収係 もしかしてひよっとすると……。

女 分かります？

回収係 自家製……？

女 ピンポーン！ 正解ー！

回収係 えーうそ！？ おいしー！

女 ちっちゃいレモンの木を育ててるんです。

回収係 え、本物の？ 本当のレモンの木？

女 はいー、いただいたんです。

回収係 そしてそしてもしかして、うちの砂糖使ってます……？

女 ピンポーン！ 正解ー！

回収係 ありがとうございますー！ すごいなー！ えー、毎日来ようかな

！？

女 えー、毎日は出しませんよう？

回収係 えー。

女 (笑っている)

回収係 (仕事に戻る)

女 ああそうだ、せっかくですから。

回収係 はい？

女、チエストから粗品のタオルを取り出す。

女 どうぞー使ってください。この郵便局の開局百周年を記念して作っ
たんです。

回収係 おーこれはこれは、すみません何から何まで。

女 ほんとは来年なんですけどね。

回収係 え？

女 ああ、百周年。でも今年カテゴリーAに昇格しましたから、そのお
祝いも兼ねて。

回収係 おお、凄いですね！ おめでとうございます。

女 ありがとうございます。

回収係 じゃあ早速。

回収係、タオルを取り出して使う。

女、タオルの包みを取って、捨てに行く。

回収係、仕事を終える。

回収係 はい、以上です。

女 お疲れ様です。

回収係 こっちの三通だけ、北部の工場に転送していただけますか？

女 はい、かしこまりました。前の担当の方は確か、そちらに異動され
たんですよね？

回収係 そうですそうです。確か最初にここに伺った時……。

女 ええ、ええ、ご一緒にいらっしやうってましたよね。

回収係 そうですそうです。あつちの方が住みやすいですからね。気候的に。

あの年齢だとここの勤務は堪えるでしょう。あのー……。

女 はい？

回収係 もう少し涼んでいっても……。

女 もちろん、どうぞどうぞ。

回収係 助かりますーありがとうございますー。

女 いえいえ。その代わり話相手になってくださいいな。

回収係 喜んで。

女 ……。

回収係 ……。

女 話そうと思ってみると、話すことってなくなるものですね。

回収係 そうですね。

女 あの、素朴な疑問なんですけど。

回収係 はい、なんでもどうぞ。

女 どうしてわざわざ手紙を取りにいらっしやるんです？

回収係 ああ……。

女 近いから、とか、退屈だから、とか、前の方もあなたも仰っていま

すけど。それにしても私としてはやっぱり、心苦しさがないわけ

はないですし。配達が私たちの仕事ですから。

回収係 当然の疑問ですねえ。

女 でしょ？ ずっと気になってたんです。

回収係 そうですよね……どうしよっかなー。実は話してはいけないことに

なってるんですよ。

女 ということはやっぱり、別の理由があるんですね。

回収係 まあ、そんなところで。

女 無理にとは言いません。

回収係 申し訳ありません。

女 レモネード、もう一杯いかが？

回収係 いやいやそれはさすがに……もう一杯だけ。

女 (少し笑って) はい。

女、回収係がコップを渡そうとするのを手で先に制す。

コップを取ると奥へ去って行く。

回収係は彼女を見送ると、窓の外を見るために立ち上がった。

女、レモネードを持って戻って来る。

回収係 ああ、どうも。

女 庭を見てらっしやるんですか？

回収係 ええ。あれは桜ですか？

女 はい。

回収係 かなり古いですね。

女 私の先祖がこの町に来た頃には、すでにかなりの大ききだったそう

ですから。

回収係 その頃はきつと、春に咲いていたんでしょうね。

女 そうでしょうね。

回収係 今年はいつ頃咲きました？ あの桜は。

女 いえ。実はあの桜はもう、花をつけないんです。

回収係 え？

女 他の桜は開花の時期を段々と早めて、今では十二月頃に咲くでしょ

う？

回収係 ええ、そうですね。

女 あの桜はその流れに乗り遅れたみたい。開花日の全国平均が二月になった頃にはもう、咲かなくなっていたと母が言っていました。私
が子供の頃です。

回収係 そうでしたか。

女 いつまでも春の風物詩でいたいのかも知れません。

回収係 古参の桜の矜持というやつですか。

女 そうかも。だから毎年春になると、今年はもしかしたら咲くかもしれない、この馬鹿みたいな暑さを押しのけて、固い蕾が開くかもしれないって、そう思って庭に出てしまう。

回収係 昔だったら、満開は今頃だったでしょうね。

女 ええ。もしかして今、咲いてる？

回収係 え？ いや、まさか。残念ながらごつごつと突っ立ってむっつり、押し黙っていますよ。

女 そうですか。残念。

二人、並んで庭を眺めている。

と、回収係は何かに気付き、女の方を見る。

彼女の顔の前で自分の手を振る。彼女はそれに気付かない。

彼女は、流れる空気が変わったのを察した。

女 ……気付いちゃいましたか。

回収係 あの、でも、じゃあ、どうやって……？

女 この建物の中のことは大体分かるんです。慣れてますから。先天性じゃなくて進行性のものでしたから、最初から見えなかつたわけじゃありませんし。それに今でも、強い光なら感じる事が出来るん

ですよ。

回収係 すみません、全く気が付きませんでした。

女 謝らないでください。気付かれたたくなくて隠していたのは私ですから。

回収係 いえいえ、そんな。

女 私たちの一族は代々、視覚になんらかの障害を持つ者が多かったそうです。私の父もそうでした。単眼症ってご存知ですか？

回収係 ええ、一応。

女 この町で最初に産まれた赤ん坊は、単眼症でした。目が一つしかなかった。死産だったそうです。この町で最初の死者になったその子のために、この町で最初の葬儀が営まれました。墓地はまだなかったから、あの桜の下に埋められたそうです。

回収係 ……。

女 恐ろしい話でしょ？

回収係 その赤ん坊が、ですか？

女 いいえ。その後また子供を産もうと思ったことが、です。そのおかげで今私はここに生を受けている。

回収係 ……そうでしょうか。僕には分かりません。

女 そうですね。私にもよく分かりません。私もきつといつか子供を産むでしょうし。その子は私と同じ道を辿るかもしれない。

回収係 そうとは限らないと思います。単眼症の赤ん坊だって、あなたの視力のこととは関係ないんじゃないでしょうか？

女 呪いだと思ってます、私は。

沈黙。

回収係 ……手紙。

女 はい。

回収係 僕がこうやってわざわざ手紙を取りに来るのは、産業スパイを防ぐためです。うちで扱ってるドロイドは我が国の最先端ですから。うちの工場は全寮制で、電話や電子メールはおろか、携帯端末の持ち込みも許されていません。当初は郵便も配達してもらっていましたが、しまいにはそれすら疑うようになりました。(懐から端末を取り出す) これで中を見てるんです。手紙を開けずに。嫌になるですよ。

女 話しちゃって大丈夫なんですか？

回収係 あなたなら心配ない。もちろん、目のことは関係なく。

女 ありがとうございます。……嫌な世の中ですね。

回収係 ええ、まったく。嫌な世の中です。

女 ……。

回収係 ……。

女 私、一番最後に見たものが、満開に咲いたあの桜だったんです。子供の頃。その時はもう色が分かりませんでしたから、薄墨色の桜でしたけど。

回収係 来年は咲くでしょうか。

女 咲いても私には見えない。

回収係 代わりに見ますよ。また春になったら。あなたの代わりに見て、あなたに伝えます。

女 来年？

回収係 毎年でも。

女 ……口説いてます？

回収係 いえ！ 今のは、違います。

女 そうですか。……咲くといいな。

回収係 咲くといいですね。

二人、窓の外を眺めている。ゆっくりと暗闇が訪れる。瞼を閉じるように。

この町の思い出

「私が母の不便を知ったのは、ずいぶんと後のことでした」

彼女はそう語った。

「母はなんでも出来たものですから。気付きもしませんでした。父がよく母を手伝いましたから、そのためもあるのかもしれませんが。高い所にあるものを取ったり、力仕事をしたり、そういったことは当然のように男である父の仕事で不思議はなかったものですし、買い物をしてくるのも、父でしたら製糖工場の勤務の帰りに店へ寄るのが、どう考えても効率的でしたから。」

郵便局での仕事もテキパキとよくこなしておりました。ほとんどの業務が全自動化され、専用のドロイドも運用され、ネット上で大概の手続きを済ませることが出来ましたので、当然と言われれば反論は出来ませんけれども、それでも女一人でカテゴリーAの郵便局を切り盛りするにはそれなりの能力が必要なものです。たまに私が手伝いを、子供の、役に立ちもしないままごとのようなお手伝いでございますけれども、何かしら世話を焼こうとすると、やれあなた、それはそこではありませんよ、これはこちらへ置いてちょうだい、まだそのボタンを押してはダメよとこと細かに教えてくれたものです。私は母の手伝いをするのも、失敗して母に正されるのも、その時に母がちよっと困ったように、でも内心の嬉しさを隠せない様子で、怒っているように見せかけて笑いますのも、本当に嬉しかった。無邪気なものでございましたわ」

彼女はそこまで話すと、一息ついて紅茶を飲んだ。

「母が外出する時はいつも父と一緒にでした。二人仲良く手を繋いで、もしくは母が父の腕を取って、仲睦まじく歩いていたものでした。私の学校の行事に母が一人で来ることはあまりなかったのですが、一度合唱コンクールのありました折、体育館の入り口近く、後ろの方に母が一人で立っておりましたのを、子供心に覚えております。壇上で歌いながら私は、なぜお母さんは前に来て座らないのかしら、私の歌が変だから、恥ずかしくて前に来ないのかしらと少しすねってしまったものです。」

そして、あの運動会。父が出張でどうしても来られず、母が一人で参りましたあの運動会。小学校の百周年の事業やらなにやらで、百年前の運動会を再現しようと、そういう試みがあった時でした。借り物競争をご存知？ 紙に書いてあるものを運動場の中から見つけて持って来るのです。親と子供の二人一組、私は出走者でしたので、母を引っ張ってスタート地点に立ちました。今思えば母は少し困った様子だったわね。私の引いた紙には『薔薇』と書かれておりました。母は、ねえあなた、なんて書いてあるの、と私に聞きました。私は、お母さんにも読めない漢字があるのだと驚き、そして得意な気持ちになって、お母さん、これはバラよ、バラと読むのと教えてあげたのです。難しい漢字を知っているのと母は私を褒めてくれました。でも私には、この運動場のどこに薔薇があるのか、全く分かっていなかったのです。そうしましたら母が、校門の横に野ばらが咲いているわ、それを持って来ましょうと私に言いました。私が母を校門の所まで引っ張って行きますと、確かに、今まで気付きもしませんでした。野ばらの茂みが香しく匂っており、私たちがひと枝失敬して、無事にゴールしたのです。その後すぐに、私は母の不便に気が付きました。あれは今でも、いい思い出です」

彼女は遠く、窓の外へ目をやった。

銃前会議

180から130へ。

巡査と配達人がテーブルの上を見つめている。

テーブルの上には一挺の拳銃。

巡査 ……由々しきことになりましたな。

配達人 ……由々しきことになりましたね。

巡査 大佐は？

配達人 今、関係各所を奔走してらっしゃいます。

巡査 犯人探し？

配達人 いえ、事実関係の確認、と仰っていました。ご本人は。

巡査 なるほど事実関係。

配達人 確認なさっているのです。

巡査 待つしかない、ということですね。

配達人 そういうことになるでしょう。

巡査 関係各所、というの具体的にはどこの何で誰なのだね？

配達人 はい、私も具体的には知らないのですが、なんでも大佐が海軍に在籍していた折、同じ部隊にいた方が現在防衛庁のしかるべき地位にいらつしやるらしく。

巡査 なるほど。

配達人 その方にこの町の周辺の状況を具（つづき）に確認する、ということらしいです。

巡査 なるほど、賢明だ。

配達人 とはいえ、いち配達人の私の身の上では、大佐のお考えの全てを窺

巡査 い知ること至極困難、結局は大佐のお戻りを待つしかないでしょう。もつともだ。いや君、それは私にしたってそうだ。私ごとき田舎巡査には計り知れないものがある。

配達人 由々しきことになりましたね。

巡査 ああ、由々しきことになった。

配達人 もうお戻りになられてもよい頃なのですが……。

巡査 君、大佐がお戻りになる前にもう一度ことの次第を説明してくれないか。どうも私には技術的な観点で疑問が残る。

配達人 まず、郵便局では昨今、立体印刷機による物品の形成サービスが広く行われております。

巡査 うむ、それは知っている。完成したものを運ぶのではなく、商品の情報を送信し、それを受取人側で再現、製造するという、そのことだろうか？

配達人 いかにも。それによって輸送のコストはほとんどゼロに等しくなりました。とはいえ、一般家庭の立体印刷機では再現に限界がある場合が多い。単一の材料では形成が困難な、複数の材料を必要とする複雑な機械などがまさにそれです。郵便局にある立体印刷機は業務用の最新機器でありますため、そういった複雑な品物を受取人に代わって製造し、配達、もしくは直接引き渡すという、そういうサービスを行っているのです。

巡査 複雑な機械というのはつまり、この拳銃のようなもの、ということだな？

配達人 いかにも。

巡査 そしてこの町の郵便局に、この拳銃が一挺、間違つて配達されてきたと、そういうわけだな？

配達人 いかにも。出来上がったものを見て肝が縮み上がりました。

巡査 由々しいな。

配達人 由々しいですね。

巡査 君、この拳銃の差出人は一体誰だか分らないのかね。

配達人 高度なセキュリティによってプロテクトされておりまして。

巡査 では君、この拳銃の受取人は一体誰だか分らないのかね。

配達人 高度なセキュリティによってプロテクトされておりまして。

巡査 じゃあどうなるんだいこの拳銃は。

配達人 分かりません……。

巡査 一体全体どういふことだい君！

配達人 分かりません……！

そこへ、大佐が帰って来る。

大佐は左目に眼帯をしている。

大佐 諸君。

巡査 大佐！（敬礼する）

配達人 大佐！（敬礼する）

大佐 （軽く敬礼を返す）由々しきことになったな。

巡査 由々しきですね。

配達人 由々しきですね（巡査とほぼ同時に）。

巡査 それで……。

大佐 いやはや、参ったよ。

配達人 一体これは、どういったことなのでしょう……？

大佐 最初に疑ったのは陸軍、もしくは海軍の何者かが武器データを横流

りしている可能性だ。両方に事情を聴取したが、お互いに罪をなす

りつけあって埒が明かない。

大佐 戦前とはかく、陸軍と海軍は今も仲が悪いのですか？

一方、今やお互い仮想敵国と言わんばかりだ。体質が違うのだから致し方あるまい。

配達人 陸軍、海軍、どちらかの策謀とは考えられませんか？ スキャンダ

ルを巻き起こそうという。

大佐 いや、それでは差出人も受取人も分からないのが解せない。スキャ

ンダルにするのであればはつきり明かせばよからう。

巡査 では一体どういふことなのでしょう？

大佐 そこで第三の勢力が浮上してきた。最近、この陸海軍の反目につけ

こみ、国家の転覆を図ろうとしている不義の輩が跋扈（ばっこ）し

巡・配 なんと！

そこへ、息子と娘が帰って来る。

息子 ただいまー！

娘 ……（無言で手を振る）。

大佐 おかえり。

息子 お父さん、なにしてんのー？

大佐 大事な話し合いだ。部屋に行つてなさい。

配達人 その輩というのは、最近山間部で陸軍と小競り合いをやらかしてい

る、あの連中と考えて間違ひありませんか？

息子 お巡りさん、なにしてんのー？

娘 ……（無言で手を振る）。

巡査 おう、ぼうずども。

配達人 坊ちゃん、お嬢さま、今我々は会議を一つやつついているところで

すので、向こうのお部屋でお待ちください。

巡査 ではこの拳銃はその連中が密輸しようとしていたもの、ということ

でありますか？

息子 わ、拳銃だ！

息子、娘、机の上の拳銃に群がる。ワーワーとうるさい。

大佐ほか大人たち、それを触らせないようにしながら話を続ける。

配達人 そもそもこの拳銃は本物なのでしようか？

大佐 装填してみないと分らんが、恐らく。

巡査 質感や重量からすれば本物でしょう。

大佐 こんな拳銃一つあった所でどうなるものでもないが。

巡査 しかし、これがごく一部だとしたら、それはやはり由々しき事態です。

配達人 製糖工場から二百二十人の技師を誘拐したのも、あの連中だということじゃありませんか。

巡査 あくまでその疑いがあるという話だ。

配達人 戦闘用のドロイドを操作させるためだとか。奴らが一体何をしたいのか、私には分かりません。

巡査 それは君、最近噂になっている火星の問題だろう。

配達人 火星？

大佐 現在建設中の月面基地の他に火星に居住区を建設しているという、あの話かい？

巡査 ええ、政治家や権力者や金持ちどもが火星にこぞって逃げ出すつもりであると、その話です。バカバカしい。

大佐 全く、荒唐無稽も甚だしい。

配達人 そんな理由で闘っているのですか？

巡査 この星を捨ててお前らだけ逃げるのは不公平というわけさ。

大佐 下らん。行きたいならば自分たちも火星に行けばよかろうちよつと

待てお前ら！

息子、娘、収まる。

大佐 私たちはな？ 今とても大事な話し合いをしているんだ。頼むから

向こうに行っていてくれ。な？

息子 でも、ほんとだよ！

大佐 何が。

息子 火星に、新しい町が出来るんだよ！

巡査 そんなバカな。

配達人 あんな遠い所に、一体どうやって町を作るっていうんです。

息子 ここは郵便局だよ？ そんなことも分からないの？

大佐 どういうことだ？

息子 立体印刷機を一台、火星に送れば済む話じゃないか。

一同 ……。

息子 なんでもかんでも向こうで作ればいいのさ。

配達人 でも、その原料は？

息子 向こうで採ればいいよ。火星にね、町が出来るんだよ！

大佐 しかし、だからといって闘っていいと、そういうことにはならない

だろ。

娘 でもお父様。

娘 急に喋った。

大佐 この星はあと百五十年ほどでなくなってしまうのでしょうか？

大佐 あくまで、そういう学説があるという話だ。

娘 短ければ百三十年、データ上では百五十年、希望的な観測をもって

してもあと二百年ほどで星としての寿命が尽きると、そう聞いたわ。

大佐 誰がそんなことを。

娘 授業で先生が。

巡査 全くけしからん。自前の終末思想を子供たちにまで植え付けるのは

よしてほしいな。

大佐 まあまあ。

娘 私、怖い。

大佐 怖がらなくてもいい。私がお前たちを守ってやる。

娘 今闘っている人たちも、きつと恐ろしいのだから。自分たちだけがこ

の星に置いていかれやしないかと、孤独に震えているのだから。

大佐 いいから、お前たちは向こうに行っていなさい。お母様が夕飯の支

度をして待っている。

息子 はーい。

娘 はーい。

息子、娘、去って行く。

巡査 さすが大佐のご息子とご息女、大変利発でらっしゃる。

大佐 いやすまない、見苦しい所をお見せした。

巡査 その教師にはやはり一言言っておかねばなりませんまい。明日小学校

へ赴くといたしましょう。

大佐 いや、いいんだ。その方も学究の徒、悪気はなからう。

配達人 ところでこの拳銃は、いかがいたしましたしゅう……？

大佐 とりえず君が証拠品として預かってくれませんか？

巡査 心得ました、署内の保管庫に置いておきましょう。

配達人 しかし、先の見えない世の中になってきましたね……。

大佐 確かにそうだ。しかし考えようによっては今までもずっと、先は見

えてはいなかったのだ。もしかしたら私たちは、先が見えないこと

にようやく気付いただけなのかもしれない。

配達人 そうだとしたら私たちは、これから一体どうしていけばよいのでし

よう……？

考え込む三人を残して。

ゆっくりと暗闇が訪れる。

瞼を閉じるように。

この町の来訪者

もう少し先まで行けば、町があることを知っている。その男は周囲に素早く視線を走らせて、誰にも追われていないことをもう一度確認した。男が今いる山はおそらく本来は誰かの所有しているものなのだろうが、数十年管理された様子がなく、ハリエニシダが生い茂り、成長の早いレッドウッドが群生し、根元が腐れて枯れかけたマツの大木が所々、近くの木々に寄り掛かるようにしてなんとか立っていた。地震や落雷や強風や、その他の何かちよつとした衝撃があるだけでもろくも崩れ落ちるだろう。そしてそれは枯れ木とはいえ立派な大木で、数百キロの塊が空から降って来ることになる。男は細心の注意を払って進んだ。夜はとつぷり更けてはいるが、満月に近い月明りで周囲はかなり明るい。おかげで男は張り巡らされたツタや枝葉を難なくよけながら進んだが、つまりそれは追手からも男がよく見えるということ、周囲に気を配りながらかつ迅速に行動しなければならなかった。

暫く進むと視界が一気に拓け、眼下の山間に民家が見え始めた。それと同じに森林地帯も終わり、低木や草が生い茂る赤茶けた砂の広がる地帯へ突入した。こんな所まで森林の伐採が進んでいる。男は自分の故郷を思い出して胸が痛んだが、感傷に浸っている場合ではなかった。彼の予想が正しければ追手は少なくとも斥候二、三人、最悪一個分隊規模で、さらに悪いことにその背後には一個小隊が控えていることが既に確かな情報として分かっている。散り散りに逃げて行った仲間の安否が気になったが、希望を持たない方がいいだろうと内心では分かっていた。

彼はバックパックから予備の靴下を取り出すとブーツの上からそれを履き、さらに手頃な大きさの枝をいくつか折り取って細かな枝葉を間引いてほろほろのように束ねると、それを腰の後ろに縛り付けた。ベルトから伸びるこのほろほろが、彼が歩く度に地面にこすれて彼の足跡を消す。焼け石に水だと

思いながら、それでも何もしいわけにはいかなかった。

町の始まりに至ると、彼は手製のほうきを近くの藪の中に放り捨てた。靴下はまだ履いたままにしておいた。寝静まった家々の間を通り、レンガ敷きの目抜き通りへ至る。靴下で覆われた靴底がレンガを叩くくぐもった音が鳴る。喉が渴いていた。手近な民家に押し入ろうか？ 銃を突きつければ簡単に水が飲める。男は自分が疲れていることに初めて気が付いた。頭を振って愚かな思い付きを放り捨てた。道端で拳大の大きさの石を見つけた。それをポケットやバックパックに押し込む。残弾数が少ない。フランス革命の時には石の方がマシだと自嘲笑味に男は思った。ないよりはマシだと自嘲笑味に男は思った。

町のほぼ中央に、郵便局が建っている。正面から裏手へ回り込む。右手に大きな納屋が見えた。もしかしたらあそこに隠れていられるかもしれない。郵便局の裏がすぐ住居になっていて、男が一人、本を読んでいるのが窓を通して見えてくる。男はどきりとした。その男は左目に眼帯をしている。奴だ、大佐だ……！ 男は右の腰の辺りに吊り下げたホルスターに収まった銃に手をやったが、考え直してナイフを抜いた。音を立てるのはまずい。すると、部屋の中に十歳ほどの男の子が入って来た。大佐の息子だろう。おやすみの挨拶をしてまた部屋を出て行く。男は無意識の内にナイフをしまっていた。大佐が再び一人きりになった時に気が付いたが、もう一度抜く前に郵便局を走って離れ去った。狂ったように走り去った。

自分が何をしたかったのか、男には分からなくなっていた。ただ、ここに取り残されたくはないと、心の底から願っていた。

顔のないロケットサマー

130から79へ。

彼女の目の前のテーブルには、ワイングラスが一つあるきり。
どこか遠くで催されるパーティーが、さらに彼女を苛立たせる。
彼女は一人。いつも一人きりだった。
夫がやって来る。

夫　ここで飲むなら向こうで飲めばいいんだ。

彼女　あんた誰？

夫　君が何に怒っているのかいつも分からない。それをいつもなんとかしたい。

彼女　私はあんたが誰だか聞いたの。

夫　まだあれを根に持っているのか？

彼女　あれって？

夫　町であの子と喋っていたのを。

彼女　あなたが誰と話していようが、私には分からない。

夫　関係ないか？

彼女　関係ないと言ったんじゃない。分からないと言ったの。

夫　私は誰だ？

彼女　何年連れ添ったと思ってるの？

夫　なぜ私が誰かと聞いたんだ？

彼女　確かめたかったのよ。あなたがあなたなのか。

夫　私は私だろ。

彼女　それがこの世で最も信用ならないの。

遠くで、わっと沸き起こる笑い声。

彼女　どんちゃん騒ぎはこれきりにしてほしいわ。

夫　せつかくの祝いの席だ。

彼女　何を祝う必要があるっていうの？

夫　彼がついに県議員に当選したんだ。祝って当然だろ。

彼女　彼って誰？

夫　さっき紹介しただろ。パーティーの始まりで。

彼女　よく分かってなかった。

夫　戻って来てくれよ。いつまでも帰って来ないと怪しまれる。

彼女　怪しまれるって何を？

夫　夫婦仲が悪いとか、パーティーに出たくないとか、彼の活動に協力的じゃないとか、その他諸々のことだよ。

彼女　じゃあ問題ないわね。

夫　何が。

彼女　全部当たってる。

夫　おい！

彼女　声を荒げて同じ。

夫　一体どうしたっていうんだ。

彼女　あなたこそ、一体どうしたっていうの？ 死にゆく町ですべきこと？

夫　今、他に、やることあるんじゃないの？ 市議員になつたからなんだっていうの？ 今日の新聞見たでしょ。あとたった八十年でこの星は終わるのよ。市議員？ パーティー？ 大したジョークのセンスなこと。誰に習ったのか教えてほしいもんだわ。私も弟子入りするから紹介状を書いてちょうだい。

夫　市議員じゃない、県議員だ。

彼女 どう違うの？

夫 大きく違う。

彼女 何が。

夫 規模が違う。

彼女 じゃあ同じね。

夫 どうしたらいいんだ。

彼女 パーティーに戻りなさいよ。楽しい集まりに。この星の最後の日々

に乾杯するがいいわ。

夫 後でまた来る。

彼女 そのネクタイ、似合っていないわよ。

夫、ネクタイを外して彼女に投げつける。ドアから外へ出て行く。

彼女はワイングラスからワインを飲んだ。

ネクタイを拾って適当な所へ置く。

奥の方から、教授がやって来る。

教授 すみません、ちょっといいですか？

彼女 (教授の方を振り返って) あんた誰？

教授 すみません、議員を探しております。こちらにいらつしやると聞

いたんです。窓口に誰もいなかったもんだから、そのまま奥まで来

てしまいました。いらつしやいますか？

彼女 いないけど。あんた誰？

教授 一応、都市工学を教えます、大学で。工学部工学科都市計画コー

ス教授の、(名刺を出そうとする)

彼女 いいの、名前は。きつと覚えられないから。

教授 え？

彼女 次にあなたの顔を見たとしても、きつとあなただつて分からないだ

ろうから。そんな所に突っ立ってないで座ったら？ ワイン飲む？

白ワインでいい？ 白しかないの。男の飲み物じゃないから。構

わなければ持つて来るわ。

教授 ああ、

彼女 いいのよ。

彼女は去つて行つた。

教授は一人残されて、古ぼけた鞆をどこに置くべきか考えている。

彼女は白ワインのボトルと新しいグラスを持つて戻つて来た。

彼女 准教授？

教授 いえ、教授です。

彼女 随分若い教授なのね。

教授 ええ、すみません。

彼女 もう老人は残っていないものね。

教授 ええ、子供も減つて老人も減つて、戦争に行つた男たちも帰つて来

ず、残されたのは僕のような役立たずだけです。

彼女 そんな言い方やめなさい。自分を卑下したつて誰も喜んじゃくれな

いわよ。

教授 事実ですから。

彼女 (教授にグラスを渡す) どうぞ。乾杯しない？

教授 なにに？

彼女 消えてゆくこの星の未来に。

教授 ああ、

彼女 乾杯。

二人のグラスが触れ合う。ガラスの響き。

彼女 議員さんに何の用？

教授 この町の今後の発展に関する委員会の発足に当たって、委員に任命してくださったことに対する謝意を伝えるに、後はこの冊子を渡しに。
(鞆から紙の束を取り出してテーブルに置く)

彼女 この町に今後なんてあるの？

教授 ええ、少なくともあと七十九年は。

彼女 この星がなくなるまでは。

教授 ああ、この星はなくなりませんよ。

彼女 え？

教授 勘違いされてる方が多いんですが、この星自体は太陽が活動している限りなくなりません。七十九年という年数はすなわち、人間の息でできる環境が保持され続ける限界の年数です。

彼女 というと？

教授 あと七十九年でここに人間が住めなくなるだけです。だから大丈夫です。

彼女 何がどう大丈夫なのよ。

教授 七十九年という数字はかなり正確ですが、それもあくまでこの勢いで環境破壊が進めばという前提の話ですから。

彼女 素人が生意気言って恐縮だけど、「あくまでこの勢いで環境破壊が進めば」なんて言い方はね、結局何もできなかった連中が最後にする希望に聞こえるわ。

教授 その通りです。だから、宇宙へ逃げ出すことを選ぶ人々と、この星を改善することを選ぶ人々に分かれているわけで。

彼女 あなたは後者ってわけね。

教授 どうでしょう。僕の活動は直接的に環境を改善することに向かって
いるわけではありませんから。あくまでこの町を存続させるために

彼女 何が必要かを説いているに過ぎません。
で、何が必要なの？

教授 まずはこの郵便局。

彼女 ここ？

教授 町という単位が消滅する時、最後の砦になるのはなんだと思いま
す？

彼女 え？

教授 何がなくなれば町は終わりかという話です。交番？ 違う。学校？

教授 違う。病院？ 違う。郵便局なんです。意外でしょ？

彼女 どうして？

教授 与える影響が局所的か全体的かということですね。それに我が国の
郵便局は金融機関としての側面もありますし。

彼女 人は繋がらなければ生きていけないのね。

教授 ロマンチックな言い方を選べばそういうことです。

彼女 柄にもないかしら。

教授 いえ。

お互いを探り合う短い沈黙。

彼女 あなた、前に……。

教授 ええ、会ったことがあります。子供の頃この辺りに住んでいました。

彼女 言ってくればよかったのに。

教授 あなたの病気のことは知ってましたから。相貌失認、または失顔症。
治らないものなんですわ。

彼女 特に治療してないから。

教授 この辺りも随分寂しくなりましたね。

彼女 出て行ったから、人が。たくさん。

教授 久しぶりに帰ってきたら、もつと懐かしい気持ちになるものかと思
ってました。

夫、帰って来る。

夫 誰だあんた。

教授 ああ、僕は……。

夫 ああ、学者さんか。議員なら会場にいるよ。

教授 あなたは……。

夫 ああ、こいつの夫です。(二つのグラスを見て) 困るなあ、あんたま
で。あつちで飲んでくれよ。

教授 いや……。

彼女 私が誘ったの。

夫 あのなあ、

彼女 知ってるでしょ、私がパーティー嫌いなもの。

夫 その辺は俺がサポートするから。

彼女 結構です。

夫 なあ……。

彼女 戻って。早く。

夫、ドアから出て行く。

彼女 二つ目は？

教授 え？

彼女 この町に必要なもの。

教授 そうですね、あなたが子供を産むことです。

彼女 え？

教授

町の発展は、いや、国の発展は結局、それを支える人数の多さに比
例します。多過ぎて困りますけど、出生数を増やさないとはい
どうしようもないんです。我が国の総人口は今や六十万人を割って
いますから、かなり厳しい状況ではあるんですが。

彼女

ロケットの発射台もこの町に必要なの？

教授

え？

彼女

製糖工場の跡地に作られてるでしょ。あれは？

教授

あれは、この町の発展には、直接は……。

彼女

関係ない？

教授

ええ。

彼女

政治的に極めて高度な問題というやつね。

教授

力関係の微妙な問題です。

彼女

詭弁よ、そんなのは。

教授

……。

彼女

二つとも危ういんじゃないかしら。残念だけど。

教授

え？

郵便局と私の出産。

ああ……。

この郵便局もついにカテゴリーBからカテゴリーCに降格になっ
た。私たち、間もなく引越すの。今大学に行っている私の弟が継
がない限り、ここはそのままなくなるわ。それに私は、子供を産む
つもりはない。

でも、

私たちのことは知ってるでしょ。終わりにしたいのよ、もう。

あなたが呪いと呼んでいるものを、ですか？

私たちが一体何を恐れてきたのか、最近少しずつ分かってきた気が
する。目が見えないとか顔が分からないとか、そういうことはただ

の象徴でしかないのよ。結局私たちは同じことをずっと恐れてきた。そんな気がする。

教授 何を恐れているんです？

彼女 私は私を変えることができないのかもしれない。私は私から逃れられないのかもしれない。

教授 ある意味では誰もがそうでしょう。

彼女 眠れない夜に時々、散歩に行くの。こっそり家を抜け出して、見慣れた道からできるだけ離れて、歩いたことのない場所を探して歩く。

そのうちに私は、自分で歩くことを選んだくせに、自分で知らない風景を探したくせに、座り込んでしまいたくなるの。もう歩きたくないと感じて、実際に座り込むこともあって、ひどければしばらく泣いてしまう。そういう気持ち。それでも私はまた歩き出して、迷っているから恐ろしいのではなく、帰れなくなるかもしれないから恐ろしいのでもなく、この道がいつかどこかへ辿り着いてしまうことが段々と恐ろしくなっていく。いつの間にか私の歩く道は見慣れた風景の裏側や右側や左側や、必ずそこへ向かってしまうある点へと私を導いていく。夜の闇の中にぼっかりと私の郵便局が浮かんでいる。ドアを開ければそこには、少しイライラした私の夫が座って待っていて、二時間もどこを歩いていたんだとかもう寝るとか小言を言っていて、そして私は眠る。その時に私は悟るの。私の歩く道は、私が向かうべき場所に最初から続いているんだって。でも誰もその道を逆から辿ることはできないの。あえて何を恐れているかと言えば多分、私はそれを恐れている。分かるかしら。この気持ちには、なんて名前をつければいいんだと思う？ 名前のないこの感情が、きつと私たち誰しもの心を故郷へと向かわせるのよ。

沈黙。

教授 参ったな。何も言えなくなりました。

彼女 何も言わないで。

教授 ……もう、会場へ向かいます。

彼女 上で飲み直さない？ ワイン以外も置いてあるから。

教授 でも、

彼女 不思議ね。どうして何もかもがどうでもよくなると、たまたま誰かと一緒にいたくなるのか。

教授 僕が誰かも分からないのですか？

彼女 あなたが誰かも分からないからよ。

教授 ……。

彼女 ……上で待ってる。私たちの寝室に誰が入って来たって、私にはあなたか夫かの区別も付きやしない。

彼女 ……。

彼女 ……。

彼女 ワインボトルとグラスを持って去って行く。

教授 一人残されて、途方に暮れているようにも見える。

教授 ……。

教授 ……。

教授 ……。

教授 ……。

この町の帰郷

夜の闇、その先に、あの町。眼前に広がる茫漠とした夜。その中のどこかで、あの町が僕の帰りを待っている。

シャトルは音もなくホームに到着した。巨大な蛇のように長く伸びた銀色の車体は、滑らかに滑りながら停車すると、シューッと軽く息を吐き出すような音を立てた。表示灯が各車両の出口付近上部でオレンジ色に灯り、何もなかった車体に唐突にドアが現れる。車体を覆う柔らかな金属には配線などが存在せず、ある電気信号を受信するとほぼ無限に近いパターンで分子構造を組み換え、形状や強度を自由に変化させることができる。メタリウムという名で呼ばれているこの金属は記憶媒体としても使用されており、スプーン一杯ほどの分量で実に十テラバイトの容量を有する。使用される際はオープンと呼ばれる特別な機械でカード型に変えてやり取りし、情報を書き換える際は同じくオープンでどろどろに溶かしてしまう。基本的にはシャトルの技術もこれの応用である。

遠い過去の人々が憧れの未来に期待したような先進技術は、しかし、もはやこれくらいしか残っていないと言ってもいい。陸地の八割が海底に沈み、氷河の侵出によって大都市のほとんどが壊滅的な打撃を被っていた。あの町で隆盛を誇った製糖工場も、僕が子供の頃に完全に閉鎖された。今ではその跡地に月や火星への定期便の発射台が建設されているらしい。

あの町に向かう車両には、僕以外の乗客の姿が見当たらない。発車時刻ぴったりに出発したシャトルは、数分ほどで海底トンネルへとその身をくねらせて潜り込んで行った。壁面にあるボタンに手を触れると窓が現れる。海底の薄暗がりの中に、家屋やビルが鬱蒼とした森のように潜んでいる。海底ト

ンネルを分厚いガラスで作ろうなどと、一体誰が言い出したのか。そいつの思い付きを恨んだ。あるいは僕たちをこういう気持ちにさせて、同じ過ちを繰り返さないようにしているのだろうか？ 余計なお世話だと言わざるを得ない。

ブランチに差し掛かると巨大な蛇は次々に分裂し、四十席ほどの座席数の楕円形に変化してそれぞれの行き先へと向かっていく。「枝」という名前の通り、ブランチは十路線ほどに分岐しており、進むにつれてさらに分岐して、到着する頃には乗客一人分の車両となっていることも少なくない。分岐して確実に分岐したが、やはりあの町への乗客は僕一人だけらしい。

久しぶりにあの町へ帰る。大学にいた頃は結局一度も帰らなかった。誰も待っていないからではない。姉夫婦が郵便局を守ってはいしたが、僕は義理の兄があまり好きになれなかった。最近ではあの種の間人がどこもかしこも埋め尽くしてしまっていて、テレビを見ることがも外で食事することもほとんどやめてしまった。口を開けば政府の批判、そこから火星に行くにはだの月に行くにはだの議論になって、話が終わる頃にはどうしようもない疲弊と絶望に彼らはその身を任せる。もっと気持ちよく生きたらどうか、スカッと生きたらどうかと、僕は彼らに言いたくなる。

果たしてお前はどうか？ 自分に問うた。僕に彼らを批判する権利があるのか。進退窮まり覚悟を決めねばならなくなった時、僕ならどうするのか。自分にだけ何も起こらないなんて、そんな都合のいい予想は捨ててしまったかった。いつか訪れる試練に、どう身構えているべきか。

あの町が僕を待っている。夜の闇の中で。あの町に帰り着いたらその時に、僕は覚悟を決めることを始めなければならぬ。それは、新しい旅に出ることとほとんど同じ意味を持っている。

この町に手紙は来ない

79から74へ。加えて、220。

彼は一人で手紙を読んでいた。それはかなり古ぼけた手紙で、数枚の便箋は強い風が吹けば崩れ落ちてしまいそうに見えた。乾ききった落ち葉のようなそれを彼は扱い慣れているようで、内容すら諳んじているに違いない。

彼はチェストから眼鏡を取り出すと、それをかけて手紙を読んだ。

今度はすぐにやめて、手紙を置き、眼鏡を外す。

遠く、窓の外の、桜の木のある庭を眺めた。

ノックノックノック。

彼は眼鏡を隠すと、ドアを開けに向かった。

ドアを開けるとそこには、先生が立っている。

彼 先生。

先生 よっ。

彼 もう出発したのかと思ってました。

先生 お前に何も言わずにいなくなるわけないだろ。

彼 勝手にすねてましたよ。

先生 次の便で発つよ。だから、一週間後のバスで首都に向かう。

彼 寂しくなります。

先生 俺もまだよく分かってないんだけど、さすがに火星からここへは手紙は出せないよな？

彼 おそらく。電子メールがいいところでしょ。

先生 味気ないのは嫌いなんだよな。

彼 理系の人間の台詞じゃねーや。

先生 まあね。

彼 で、何の用です？ コーヒー飲みますか？

先生 いや、いいよ。すぐに行かなきゃいけない。今日はこれを渡しに来たんだ。

先生、大ぶりの封筒を彼に渡す。

彼 検査結果ですね？

先生 そうだ。

彼 先生はもう見ました？

先生 ああ。

彼 どうでした？

先生 それ（結果）がそれ（封筒）だろ。

彼 主治医の口から聞きたいのに。

先生 できれば避けたいもんだよ、辛い役回りは。

彼 ……じゃあ、やっぱり？

先生 うん、網膜色素変性症だ。しかもかなり進行が速い。

彼 治療は？

先生 できなくはないけど、この星では無理だ。俺もいなくなるし。

彼 あとどれくらいなんですか？

先生 完全に見えなくなるまで？ 一年か、もしかしたら半年くらいかも

彼 しない。

先生 速いですね。

先生 準備するには充分だよ。今から点字を学んだって充分間に合う。

彼 そりゃよかった。ラッキー。

先生 冗談で言ってるんじゃないぞ。

彼 分かってます。

先生 あれはどうするんだ。

彼 あれって？

先生 月だよ。月面居住区の公営団地。当選したんだろ？

彼 ああ。……先生はどうすればいいと思います？

先生 行っちゃえば？

彼 いいのかよ。

先生 いいも何も、もう全部検査は終わってるわけだし、ちゃんと審査は

通ってるわけだし。この町の代表として胸を張って行っておいでよ。

彼 月に行ってから失明したらどうなります？

先生 そりゃ、手厚くケアしてもらえるだろ。月にだって多少優秀な医師

は派遣されてるだろ。治してくれるかも。

彼 火星に行けなかった医者でしょ？ 信用できません？

先生 志願する人だっている。それに、なにも病気になったら殺されるっ

てわけでもないだろうし？

彼 ないだろうし？

先生 ないない、絶対ない。大丈夫、保証するよ。

彼 考えます。

先生 むぎむぎこの星に留まって、見殺しにされることはない。

彼 見殺しって。

先生 どうして？ その通りだろ。その証拠に世界中できっちり暴動が起

こってる。大きな反発もなく受け入れられてるのはこの国くらいな

もんだろ。

彼 まあ、そうですけど。

先生 まあ、俺やお前の台詞じゃないけどな。

そこへ、友人がやって来る。

その後ろには、そつと控える形で、少女が立っている。

友人 先生！

先生 うるさいやつに見つかった。

友人 うるさいやつとか言わないでくださいよ！ まあ、今朝のニュース

見た？ 可住予測年数、ついに七十五年切っちゃったよ！

彼 あとどのくらい？

友人 七十四年と二百二十日だって。

先生 へえ、差し迫って来たなあ。

友人 いやいや、先生には関係ないでしょ。嫌味ですか？ ってか、いつ

火星に行っちゃうんですか？

先生 一週間後のバスで首都に行って、準備して、次の便で行くからまあ、

二週間後には火星にいるかな。

友人 マジですか？ えー、めっちゃうらやましいわ。いいな。あ、こ

の人ね、お医者さんだから火星に行くんですよ。

少女 ああ、そうなんですか。おめでとうございます。

友人 んでこっち（彼）はね、この町の代表として申請して受かって、見

事月に行くんです。

彼 そうなんです。

少女 それはそれは、二人ともおめでとうございます。

彼 ありがとうございます。でーあの、この人は誰？

友人 あ、なんかね、その辺うろろしてたから連れて来た。

彼 はあ？

少女 うろろしてたわけじゃなくて、ホテルを探してて……。

友人 ホテルなんてあるわけじゃないでしょ、この町に。

少女 すみません、この辺初めて来たので。

彼 観光……ですか？ いや、

友人 まさか。

彼 なんもないもんな。

少女 実は郵便局を探しに……。

友人 ここここ。

少女 え？

友人 ここここ。

少女 あ、そうだったんですか。良かった。

友人 こっち（ドア）裏口で、表に回ればもつとちゃんと郵便局。ここが

休憩所ってか、家スペースの一部。

少女 ああ、

友人 で、こいつが郵便局長。

彼 どうも。

少女 ああ！ お若い！

彼 まあ、はい。で、どういったご用で？

先生 俺、もう行くね。

彼 ああはい、また。

友人 そんじゃ！

先生 おう。

先生、去る。

少女 実はあの、手紙を届けに来まして……。

友人 手紙？ 郵便局に？

少女 手紙？ 郵便局に？
これはです。（荷物から手紙を取り出す）この郵便局留になってるんです。

彼 ほんとだ。

友人 郵便局留ってなに？

彼 近所の郵便局あてに郵便物を届けて、それを取りに行くことで受け渡しが完了するシステム。

友人 へえ。

彼 もっとも、百年以上前の話だけど。差出人は？

少女 私のご先祖様です（彼に手紙を渡す）。

友人 ご先祖。

少女 実は、私の家も火星に移住することになって、家の整理をしてたんです。そうしたらこれが。

友人 え、あんたも？ しかも家って、一家丸ごと？

少女 ええ、はい、まあ……。

友人 マジかよーめっちゃセレブじゃん！ 俺だけかよ残留組はー。

彼 （手紙をじっと見つめている）

友人 どうかした？

彼 いや、別に。とりあえず、お預かりします。ありがとうございます。

少女 いえ。

友人 っていうか、それだけのために来たの？

少女 はい、まあ……。

友人 普通に投函すりゃよかったのに、手紙なんだから。

少女 そう思ってたんですけど、その……。

彼 なに？

少女 最近の手紙はまともに届かないって、凄く時間が掛かったり、途中でなくなっちゃったりするって聞いたもんですから……。

友人 あらら、耳が痛いね。

少女 しょうがないよ、事実だから。いやほんと、すみません。

友人 いえ。……じゃあ、私はこれで（帰ろうとする）。

少女

友人 ちよと待てちよと待てちよと待って！ 嘘でしょ？

少女 え……？

友人 そんなあっさり帰るの？

少女 ああ、はい、もうシャトルは終わってますから、宿を探さなきゃいけないし。

友人 泊まっついていきなよ！

少女 え、どこに？

友人 ここに！

彼 えっ！？

少女 いや、でも、

友人 飲もうよ！

少女 私、未成年、

彼 あのさ、

友人 部屋余ってるから！

彼 お前さー、

少女 でも、

友人 こっち！ 案内するから！

友人、少女の荷物を持って奥へ去って行く。

少女、仕方なくついて行く。

見送るしかない彼。

薄闇が訪れ、場面が転換する。

74。220から213へ。

彼女、座っている。

彼 全くよー。

彼女 ごめんごめん。

彼 四年だぞ？

彼女 ごめんごめん。

彼 急に来んなよ。

彼女 ごめんごめん。

彼 四年もほったらかしにしてたくせに。

彼女 だから、ごめんごめん。立派にやっってるみたいじゃない。

彼 必死にやっ来てたんだよこちとら。

彼女 さすが我が弟。あんたに任せて正解だったわ。

彼 血の繋がりを疑いたくなるよ、全く。

彼女 せっかく来たんだからちよととはいいい顔しなさいよ。

彼 そういうこと言うく？

彼女 何しに来たんだよ。

彼 お別れを言いに来たの。

彼女 は？

彼女 実は離婚したの。

彼 は？

彼女 政治家になって火星に行くんですって。付き合ってたらないわ。

彼 離婚した？

彼女 それで、アラスカに行くの。

彼 ちよと待ったちよと待った、

彼女 だからさ、もういつ会えるか分かんないから。

彼 アラスカって、

彼女 友達がいてさ、ちよとしたコミュニティが出来上がってるの。そこに行く。

彼 マジかよ……。

彼女 あんたは月に行くわけでしょ？ だからもうこれが、今生の別れかも。

彼 まあ、そうなるかもな。

彼女 ま、これまでだってそんなに頻繁に会ってなかったわけだし。

彼 会えるけど会わないってのと二度と会えないってのは全然意味が違う。

彼女 確かにね。

彼 ……。

彼女 ……最近はどうなの？ なんか面白いことあった？

彼 あー、面白いことと言えば。

彼女 なに、彼女できた？

彼 面白いことじゃないだろうそれ。あのさ、うちに昔からある、ほら、二百年くらい前の手紙、覚えてる？

彼女 ああ、あったねえ。

彼 何通かあったでしょ？

彼女 覚えてるけど、それが何？

彼 最後の一通が届いたよ。

少女、奥からやって来る。

少女 あ、こんにちほ。

彼女 ああ、どうも。あんた誰？

彼 ああこれ、うちの姉です。

少女 あ、どうも！ お邪魔してます。

彼女 ああ、はい。あんた誰？

少女 あ、ちょっと買い物行って来ますね。

彼 うん。あ、油買って来てもらっていい？

少女 分かりました。

少女、去って行く。

彼女 彼女？

彼 違う違う。あの子が届けてくれたの。

彼女 何を？

彼 だから、最後の一通。

彼女 手紙？

彼 そう。それで、なぜかそこから一週間うちにいるの。

彼女 はあ？

彼 意味分かんないでしょ。

彼女 どうなってんのあんた。

彼 姉ちゃんに言われたくないけど。

彼女 それで、手紙にはなんて書いてあったの？

彼 ああ、なんか、「病篤く、伏せにけり」とか、「相見ゆこと能わず」とか、そんなこと。

彼女 なるほど。で、あの子がそれを持って来たってことは、

彼 そうだね。

彼女 本家の子ってこと？

彼 一応俺らと血の繋がりはあるってことじゃない？

彼女 あの子はそれ、知ってるの？

彼 知らないと思うよ。

彼女 ……もうしちゃったの？

彼 は？ ……いやいや、してないよ。そういうんじゃないし。

彼女 あっそ。ま、血が繋がってるって言うてもだいたい遠いからねえ。

彼 しません。あの子未成年だし。どっちにしろしないけど。
彼女 うん、その方がいいだろうね。どんな子供が産まれて来るか分かんないし。

彼 ……。

彼女 あんた、体は？

彼 え？

彼女 なんともないの？ 元氣？

彼 ああ、まあ。

彼女 あっそ。

彼 なんだよ急に。

彼女 別に。じゃー、行くね。元氣で。

彼 待った待った、もうシャトル終わってるだろ。

彼女 ああそっか。じゃあ泊まってくわ。私の部屋空いてる？

彼 いや、今は俺が、

彼女 一晩くらい我慢しなさいよ。

彼女、去って行く。

彼は諦めたように見送り、仕事の準備を始める。

夜が更けていく。

少女が戻って来る。

少女 ただいま。

彼 おかえり。遅かったね。

少女 ちょっと迷っちゃって。今夜は冷えますね。

彼 まだ春だからね。

少女 また雪が降りそうですよ。

彼 このまま氷河期になったりして。

少女 有り得る。それ、何やってるんですか？

彼 え？ ああ、これ？ 飾り字だよ。

少女 飾り字？

彼 時々頼まれて手紙の代筆やってんの。こういうさ、ちょっと飾りのついた字を書いてあげるんだ（便箋を見せる）。

少女 わあ、凄い！ 細かい！

彼 趣味。唯一の。地味でしょ？

少女 素敵です、すごく。私もお願いしていいですか？

彼 いいよ。誰に手紙出すの？

少女 母に。私の。

彼 そう。…あの、

少女 はい。

彼 ここに居続ける理由を聞かないからといって、それでいいと思ってるわけでもないんだ。

少女 ……はい。

彼 いたければいいけど。でも心配はかけてるだろ？ だから、

少女 心配、してるとしても、

彼 してると思うよ。

少女 誰のための心配なのか、怪しいもんです。

彼 ……。

ノックノックノック。

彼 ああ、来たな。

少女 誰です？

ドアを開けて、友人が入って来る。

友人 おいつす、冷えるねー。

彼 いや、わりいな。

友人 あらどうも。

少女 どうも。

友人 なになにに、急に呼び出して。

彼 まあ座れよ。

友人 え、なに？ 怖いわ！

少女 コーヒー飲みます？

彼 ああいいよ、俺が……いや、お願いしていい？

少女 はい。

少女、去つて行く。

友人 ほんで、どしたよ。

彼 (封筒を取り出して) とりあえず、理由は聞かないでくれ(封筒を友人に渡す)。

友人 え？ うん、分かった。よく分かんないけど(封筒を受け取って中を見る)。……これさ、なんで俺の名前になってんの？

彼 お前に、権利を譲渡した。

友人 は？

彼 俺の代わりに、月に行つて欲しい。

友人 は？

彼 以上。

友人 ……。

彼 ……。

友人 いやいやいや、

彼 だから、うん。

友人 意味分かんねー！ なんで！？

彼 だから、理由は聞くなつて。

友人 いや無理でしょ、意味不明でしょ！

彼 いいから黙つて月行けよ。

友人 いや、ダメでしょ！ 検査とかしてねーし。

彼 今年の初めに健診受けてただろ？ その結果を元にちゃんと審査してもらつてるから。

友人 えー、でも、

彼 大丈夫。ちゃんと手続きできたから。

友人 分かった、あの子だろ！

彼 は？

友人 あの子と一緒に火星に行くんだ！ だからだ！

彼 違うよ、俺はどこにも行かない。ここに残る。

友人 ……マジで？

彼 この町に残る。

友人 ……理由、聞いちゃダメなの？

彼 頼む。

友人 えー、ちょっと、とりあえず、ありがとう！

彼 うん。

友人 マジでありがとう！

彼 うん。

友人 ちょっと遅かったけど、ありがとう！

彼 は？

友人 もうさ、死んじやうと思つてさ、童貞捨てちゃつたよ。

彼 はあ？

友人 隣のソープで童貞捨てちゃつたよー。ちょっと待つときゃよかつ

た。

彼 ああ……。でもあと七十四年もあるのに……。

友人 あと七十四年童貞でいるのは無理！

彼 うーん……。 (何かが間違っている気がする……)。

友人 でも、マジでありがとう！

彼 うん。

友人 お前のこと、マジで一生忘れない！

彼 うん。

友人 お前マジでいいやつだわー。

彼 うん。

友人 ほんつとに、マジで、ありがとう！ 向こう行っても絶対お前のこ

と忘れないわー。

彼 うん。

友人 月の上からお前のこと、めっちゃ見守ってるわー。

彼 あー、うん。

友人 ほんとにこれ、マジで言葉にできない。マジでありがとう。

彼 うん。

少女、
コーヒーを持ってやって来る。

友人 こいつのこと、マジでよろしくね。

少女 え？

友人 ほんつとマジで、……言葉にできない！

彼 分かったから、もう行けよ。

友人 うん。マジでありがとう。

彼 出発は二日後だから。急いで準備して。

友人 オッケー！ マジで、ありがとう！ やったー！

友人、去ろうとするが戻って来て、彼を抱き締める。帰って行く。

入れ替わりに、先生が入って来ている。

少女 (気付いて) あ……。

先生 ……。

彼 え？

彼、先生のことが見えていない。

先生 俺だよ。

彼 ああ、先生。

先生 ……見えてないんだな。

彼 はい。夜盲ってやつですか？

先生 そうだ。

彼 何しに来たんです？

先生 明日来ようかとも思ったんだけど、時間がなさそうだし。頼んできた

もの、取りに来た。

彼 ああ、そうか。

彼はチェストから手紙を取り出し、先生に渡す。

先生 ありがとう。

彼 誰あての手紙なんです？

先生 ま、友達かな。

彼 友達か。

先生 ……なんとなくお前は、こうするような気がしてた。

彼 え？ ……ああ、月、ですか？ 聞いてたんですね。

先生 あんだけデカイ声で喜ばれちゃあな。そりゃ聞こえるだろ。

彼 どうしてなんだか、俺にもよく分かりません。

先生 お前らしくていいよ。

彼 負けただけですよ。運命に。

短い沈黙。

先生 あのさあ、実は、言っただけでなかったことがあって。

彼 なんですか？

少女 (席を外そうとする)

先生 いや、いいんだ。大した話じゃないから、聞いてて。

少女 (留まる)

先生 俺の先祖はさ、昔、この家に住んでたんだ。この家に住む家族の使

用人だった。正確には、昔この家の納屋だった所に住んでた。

彼 そうだったんですか。

先生 使用人だった俺の先祖には若い娘がいて、この家の主人に手籠めに

された。俺の先祖は納屋でそれを見つけて、その場で主人を殺した。

死体に火を放って、娘と共にこの町を出た。

彼 ……それで？

先生 それからずっと俺たちの一族は、その罪を償ってる。この町に来て

ここに来れば、俺がこれからどうしたらいいのか、分かるかもしれ

ないと思っただんだ。

彼 分かったんですか？

先生 その質問の答えは俺のものだから、お前には教えられないよ。

彼 それもそうですね。

先生 でも俺は、ここにきてよかったと思ってる。

彼 ……。

先生 ……それじゃ。

彼 はい。お元気で。

先生 そっちなも。

二人、握手を交わす。先生は去って行く。

彼 ……頼みがあるんだ。

少女 はい。

彼 日が落ちて暗くなると俺は、ほとんど何も見えなくなる。

少女 はい。

彼 だから、日が落ちて暗くなったら、どこでもいい、何かを叩きなが

ら移動してもらってもいいかな？ 君がどこにいるか分かるよう

に。声が急に聞こえてくるのはどうも、まだ慣れてなくて。

少女 分かりました(机を軽く何度か叩く)。

彼 そう、そんな感じで。……ありがとう。

少女 いえ。

彼 ……君はこれからどうする？

少女 もう、あの家には、戻りたくありません。

彼 うん。

少女 火星にも、行きたくありません。

彼 そうか。

少女 この星で死にたい。

彼 分かった。

少女 おやすみなさい。

少女、机や壁を叩きながら去って行く。

ノックノックノック。

薄闇が訪れ、場面が転換する。

74。213から211へ。

彼女が、どこかを叩きながらやって来る。

ノックノックノック。

彼 夜だけでいいんだよ。

彼女 え？

彼 今は見えてる。

彼女 あっそ。余計なお世話だったかしら。

彼 まあね。

彼女 ……じゃあ、行くね。

彼 おう。

彼女 結局二日もいちゃった。

彼 いいよ。

彼女 本当だったら今日、月に行くはずだったのね。

彼 もういいだろ、それは。

彼女 バカね、あんた。

彼 分かってるよ。

彼女 お願いだからこっから先は、好き勝手生きてね。

彼 え？

彼女 わがままに生きて。

彼 分かったよ。

彼女 今、あんたがどんな顔してるか、分かんないよ。

彼 笑ってるよ。いいから早く行けよ。

彼は無表情のまま、彼女を見つめている。

彼女は彼にそっと近付いて、頬にキスをする、去って行った。

そこへ、少女がやって来る。

少女 見送りに行かなくていいんですか？

彼 子供じゃないんだから、一人で行けるよ。

少女 あ、そっちもそうですけど、ロケット。

彼 ああ、そっか。いいよ、昨日散々飲んだし。

少女 もう間もなく打ち上げですよ？

彼 八時だって言ってたから。

少女 大丈夫かな。

彼 大丈夫だよ。

少女、窓の外を眺めている。

どこか遠くから低い振動が響いてくる。

彼 打ち上げが始まったみたい。

少女 意外と静かなんですね。

彼 液体燃料とEMドライブを併用してるから。

少女 なんのことやらさっぱりです。

彼 意外と静かなんだよ。

少女 怖くなくてよかった。

少女、ふと窓の外の様子に気付いて、

少女 あ。

彼 なに？

少女 雪が融けてる。

彼も、窓の外を眺める。

彼 春だね。

少女 春ですね。

彼は、そつと目をこすった。

彼 ……咲いてる。

少女 咲いてますね。

彼 薄墨色だ。

少女 満開ですね。

振動は次第に収まり、後には静寂。

口ケツトが、飛び立った。

彼 自分の中の本質に近い部分にもしも何か変えがたいものがあったって、

でもそれを変えなきゃいけないと感じた時、どうしたらいいと思
う？

少女 挑戦し続ける以外に？

彼 そう、抗い続ける以外に。もしどんなに試しても、変えられなかつ
たらその先は、どうしたらいいんだろう。

少女 側にいますよ。

彼 ……。

少女 側にいます。

二人は、窓の外を見ている。窓外に広がる春の景色。

やがて寒さが訪れれば消えてしまふ、脆弱な春。

ノックノックノック。

少女が叩く。

ノックノックノック。

彼も叩く。

ノックノックノック。

少女が叩く。

ノックノックノック。

彼も叩く。

そこにあなたがいてくれてよかった。

二人の顔を浮かび上がらせるように、光が絞られていく。

両方の瞳がそれぞれの像を捉えるように、失われていく光を求めて。

この町に、もうこれ以上、手紙は来ない。

それでも私たちは、あなたの手紙を待っている。

ゆっくりと暗闇が訪れる。

静かに、瞼を閉じるように。

終幕。

※この作品はガブリエル・ガルシア・マルケスの小説『百年の孤独』とレイ・ブラッドベリの小説『火星年代記』に着想を得ていますが、本編に両小説からの引用はありません。